

沼田奨学生主催シンポジウム

仏前結婚式と学生の結婚観

武蔵野大学人間関係学部人間関係学科四年 稲荷 咲（編）

二〇〇九年一月二四日、学園祭で賑わう武蔵野大学の構内を、楽人の奏でる雅楽の調べに包まれながら、ウェディングドレス姿の花嫁が、花婿と司婚者に付き添われながら歩く姿がありました。その場



に居合わせた方々は歓声を上げてみたり、携帯電話のカメラを向けてみたり、思わぬ展開にびっくりしなが

らも本格的な花嫁行列の様子に感歎しているようでした。この花嫁行列は、同日に開催された沼田奨学生シンポジウム宣伝の一環として行われました。

沼田奨学生主催シンポジウムとは、本学仏教文化研究所の年一回公開講座の時間をお借りして、「仏教伝道を志す者」が選ばれる本学奨学金制度のひとつ、沼田奨学金を授与された奨学生が、仏教文化研究所のバックアップを受けて主催したものです。このイベントを通して、あまり知られていない仏教の一面を仏前結婚式で感じていただき、自分自身の中

にある仏教の印象がどう変わったか、もしくはどう変わっていくのかということを考えるきっかけになればという思いを込めて企画されました。本稿では、当シンポジウムで行われた仏前結婚式のデモンストレーションとシンポジウムをご紹介します。

● 仏前結婚式

本学教員のケネス田中先生と石上和敬先生に司婚者役をお願いし、仏前結婚式のデモンストレーションを行いました。仏壇を中央に据え、法衣をまとった司婚者と、式の進行に合わせて奏でられる雅楽の厳かな音色に、会場である教室の雰囲気がいちと変わるようでした。ここでは、式次第にそって行なわれた司婚者の解説をまとめてみました。

式次第

一、開式の言葉

二、新郎新婦入場

三、勤行 表白文（ひょうびやくもん）

〔解説〕（石上）この御本尊の前で二人がこのようなにして結婚することになりました。それも、仏教という縁起という色々な要素がかけ合うことで、この二人が結婚することになりました。そして今日ここに集まった皆様が証人として、一緒に彼らの将来の幸福を、仏様の前で願うことがこの表白文の趣旨であります。（ケネス）ですから、阿弥陀仏と約束するということよりも、お互いの縁を味わい、感謝の気持ちを持って、みんなと一緒にこの式を挙げるという趣旨であります。

四、誓いの言葉

〔解説〕（石上）新郎新婦に読んでいただくの

が、誓いの言葉でありまして、新郎新婦二人が、仏様の前で、正式に結婚することを表明するという、仏前結婚式の中でも最も厳粛な場面であります。最近では、わかりやすい言葉で、仏前結婚式の誓いの言葉をするようになってきています。

五、記念念珠授与

〔解説〕（石上）記念念珠授与は仏前結婚式ならではの儀式であります。念珠、いわゆるお数珠といわれるものですが、これは仏式で結婚式を挙げるといことは、仏教徒であるということなので、仏教徒として、いかなる時も念珠を肌身離さず大事に持っていたくということでもあり、また結婚式の時に新しく二人に差し上げるといこともあります。これには男性用と女性用とがあり、それぞれ別々になっており、これを終生大事に持っていたくという

ことが念珠授与という儀式の趣旨であります。ちなみに、お数珠は左手に普段は持っていたいて、お参りするときは両手で持っていたいで、お参りするようになっていきます。

六、三三九度

〔解説〕（石上）三三九度は神前式でも行われるものでありますから、仏前結婚式だけというわけではありません。盃に、まず新郎から新婦、そしてまた新郎という順で注いでいき、注ぐ時には、三回ずつ注ぐので、三三九度と言われます。このあと本来ですと、参列されている皆さんにも、盃を配って皆で一緒に乾杯をいたします。（ケネス）アメリカでも同様に行いますが、それは日系人が持って行った習慣で、仏教独特なものではありません。アメリカでは新郎新婦とその家族という三つのグループに分かれて行われますが、キリスト教にはない儀式なので、

彼らは、こういう儀式を非常に好みます。

七、新郎新婦焼香

〔解説〕（石上）ただ今、新郎新婦が結婚後初めてご焼香されたわけですが、お焼香というと、抹香臭いとか言われたりするかもしれませんが、もともと焼香には、別の意味があります。仏様に香りや灯りとして、きれいな花やろうそくなどをお供えするわけですが、お焼香は中でも良い香りをお供えすることが大変尊いことであるとされたことに由来しています。ですので、良い香りのする木を感謝の気持ちを込めて、仏様にお供えするということがお焼香の本来の意味なのです。（ケネス）現代仏教では、お焼香は、自分を清めるという意味にも解釈を広げて、結婚してからも、自分の煩惱や欠点を克服していくという一つの象徴的な意味も含まれています。仏教では、行いというものが

重視されます。いかにして自分の行動や考え方を変えていくか、特に結婚してからもこのことが重視されます。

八、法話

〔解説と法話〕（石上）結婚式の中の儀式が一通り終わると、司婚者が結婚の意味などを贈る言葉として、両人と参列した方々にお話するというのが法話です。

（ケネス）法話の内容はどのようなものなのかというと、例えばお坊さんは結婚しないと思われがちですが、この武蔵野大学も属している、浄土真宗の開祖親鸞は、お坊さんとして正式に結婚した方があります。親鸞とその奥さんとの逸話が、いくつか現代に伝わっているので、それを結婚式の中での法話としてお話ししたりします。

その中で、私がよく用いるお話は、親鸞とその

奥さんである恵信さんの二人は、互いに口には出さないけれども、心の中では相手を仏様のような方であると思いつながら生活していたという話です。相手を仏様だと思いつながら生活するのは、とても凄いいことです、それは相手が素晴らしい人であると敬うことはもちろんですが、このような自分に愛想を尽かさずに付き合っていくような人は、仏様以外の何者でもないというように、自分を貶め相手を敬うその姿勢が続けることがとても重要なのであります。実際に、このように相手を仏様だと思いつながら毎日の生活を送ることは、非常に難しいこととあります。家族というのは一番大切なものであると同時に、一番大変なものでもあるのです。ですから、仏前結婚式の中で法話をする場合には、仏教の真髓のようなことを話すことが多いです。

例えば、英語に「Leaf」という単語があります。「Leaf」が「葉っぱ」を意味することは、皆さんご存知だと思います。仏教の有名なマークの一つに、菩提樹の葉っぱがあります。ちなみに、武蔵野女子学院のスクールマークは、菩提樹の葉っぱです。これは、少し短くて、北方系の菩提樹の葉っぱです。南方系の菩提樹の葉っぱは、もう少しすらつとしていて、ハートに近い形をしているので、結婚式にも合うのではないかと思います。「Leaf」という単語は、御覧の通り「L」「e」「a」「f」の四つのアルファベットから成っています。ここに、仏教の考えを取り込んで、結婚してから心がけることとして、次のように言うことがよくありました。

「L」は「Little things」、「小さなこと」を指します。結婚したら、大きなことよりも、細かいことが、重要になってきます。一緒に食事を作る

とか、一緒にテレビを見るとか、日常の些細なことに幸せがあり、それを大切にしなければいけないということです。例えば、一年に一回大旅行をするという計画を立てたものの、その計画を実行するために、日常のほとんどをなおざりにしてしまうというようなことは問題です。ですから、日常の細かいことを大切にしていきましようということなのです。

「e」は「Effort」、「努力」を指します。仏教では、精進ということが言われますが、先ほど仏教は行動を重視するといったように、愛で結ばれたから後は何もしないでもよいというわけではない、ということです。毎日努力を積み重ねていかなければなりません。

「a」は「awareness」、「気付き」を指します。これは、何に気付くかという、自分の欠点に気づくということです。相手の欠点はいくらでも

気付きますが、自分の欠点には気付きにくいものです。ですから、自分の欠点に気付くように心がけるということです。

「f」は「friends」、「友人」を指します。結婚したらもちろん夫婦という関係であり、子供ができたら父親母親という関係になります。しかし、もっと重要なのは、日常の生活では友人という関係にもならないということです。友人であれば、日常どんなにくだらな話でも笑いあい、そして助け合い、心が通じ合っている関係のことです。このように、いつでも悩みがあれば、お互いに話をして助け合うという関係をもつことが重要なであります。以上の四つのことを心がけながら結婚生活を送るように、というような法話をよくします。お釈迦さまは三五歳のとき、菩提樹の下で悟りを得て、仏陀となりました。ですから、菩提樹

は悟りの象徴でもあります。そういった意味からでも、実際に、葉っぱを渡し、見える所に置いておいて、「L」「e」「a」「t」の四つを心がけていけば、よりよい結婚生活を送ることができると思います。

九、讃嘆の歌

「解説」(石上) 最後はお経を少しわかりやすい言葉に訳したものを皆さんで歌います。

十、閉式の言葉

●シンポジウム

仏前式・神前式・教会式と日本における結婚式の歴史に焦点をあて、パネラーが意見交換をしました。パネラーは本学学生三名でそれぞれ神前式・教会式と日本における結婚式の歴史を担当し、講師として司婚者をしていただいたケネス田中先生、石上

和敬先生にお願いいたしました。ここでは、交わされた意見のいくつかを抜粋してご紹介します。

仏前式の縁と神前式の縁は違うのか？

久保川「私は神前結婚式について調べてきましたが、大体の流れは神前結婚式も仏前結婚式もさほど変わりはなく、違う点といえますと、神前結婚式には祝詞奏上と玉串奉天があります。祝詞奏上は神に二人の結婚を報告するもので、玉串奉天は玉串を神前に供えるというものです。神前結婚式でも縁を取り入れておりまして、前世はひとつであった男女が、ひとつの約束事によって、縁が結びついてひとつになるというのが神前結婚式です。なので、仏前結婚式で語られる縁と神前式の縁とどう違うのでしょうか？」

ケネス「私の理解している範囲で、簡単に申し上げます

ますと、神道というのは神という存在感が強いと思います。先ほど久保川さんがおっしゃっていたように、神道の結婚式では神に報告するという感じなんです。報告するということは神が存在するんです。ですが、仏教の結婚式では報告という言葉は使いません。というのも、縁というのは私と神、私と仏というのもありますけど、仏教ではもう少し横のつながりというか、自然との繋がり、人間との繋がり、そういった縁の方が強いと思います。ですから、その根底にあるのが仏様と言っているのですけど、なにか上にある仏というよりも、もつと横の繋がりに見える縁だと思っています。」

久保川「私は葉室頼昭さんの『神道 夫婦の絆』（春秋社）という本から学ばせていただいているのですが、夫婦というひとつになっているのが、前世で分かれ、そしてそれがまた神様の縁によってつながるという、確かに横の縁、横の繋がりについては

特に記載がなかったなと思います、なるほどと思いました。」

宗派によって仏前結婚式の様式は変わる？

会場「今日ではじめて仏前結婚式を見せていただいで、特に仏式ですと宗派によって違いはあるのでしょうか。また、宗派の違いによって参列者に抵抗感を与えるようなことはないのでしょうか？」

石上「私の知り合いの他の宗派のお坊さんの結婚式に出たことがあるのですが、他の全部の結婚式が分かっている訳ではないですが、今日は浄土真宗のスタイルでやりましたが、浄土真宗は始めた親鸞さんという方ご自身が結婚されているというのがひとつあるので結婚に関しても、結婚式のパイオニアのよういろいろな話を進めやすいという考え方もあるんです。他の宗派だと、お坊さんは結婚しないとい

う建前ですつと来てましたから、そういう意味で結婚の捉え方ってこと自体、他の宗派で違ってくるのではないかと思います。そして、仏式について他の様式に比べて宗教色が強いのではないかということですが、確かに神前式よりも参列者に与える印象は強いかもしれません。」

ケネス「その面では、葬式も同じかもしれません。宗派によって違いますし、参列する人たちにとつてはその人当人が、その宗派だったらそれを理解してあげる、寛容的に見てくれるのではないかなと思います。他の宗派の結婚式にあまり出たことがないのでよく知らないのですが、お経とか三三九度とか、やっтерことはそんなに変わらないと思うんです。」

中国の結婚式事情

呉「中国では日本のような仏前で結婚式を行うような習慣はありません。お寺には暗いイメージしかないからです。五十六の少数民族がいる中国では、民族衣装を着て、例えばモンゴルでは民族衣装を着て馬で新婦の家の前まで行って歌を歌ったりとか、一緒に馬に乗って新しい家へ行くというような結婚式の習慣があります。昔のモンゴル族は、新婦が馬に乗っていった瞬間に新婦の家の人は家の入り口に水をまくそうです。その意味は、出戻りしないように、というものです。今思えば、旦那さんと仲良く暮らして実家には戻ってこないようにとそういう願いが込められていたのではないかと思います。現代の中国ではキリスト教式の結婚式でウェディングドレスを着るのがほとんどで、キリスト教にも多少関係は

あると思いますが、それぞれ民族の習慣も大事にしたいと思っています。」

ケネス「中国の多くの若い人はキリスト教式の結婚式を挙げるそうですが、とてもおもしろい現象ですね。日本の結婚式は皆さん御存知のとおりかと思いますが、中国でも似たような現象があるというのは驚きです。どうしてなのでしょう？」

呉「おそらく、キリスト教式結婚式の持つ意味は分からないで挙げている方がほとんどだと思います。花嫁の着るウェディングドレスの華やかな感じに憧れているのではないのでしょうか」

ケネス「以前はどうしていたのでしょうか？」

呉「昔の上海が舞台のドラマを見ているとチャイナドレスを着ているようです。それがウェディングドレスを着るようになったのは七〇年代以降になると思います。ただ、中国から日本へと伝わってきた仏教なのに、どうして日本みたいに結婚式がないので

でしょうか？」

ケネス「仏教のお坊さんというのはもともと葬式もやっていませんでした、インドで釈尊はそういう葬式などとは一般の人にやってもらえと、修行者は修行に集中しなさいと、ましてや結婚式というのはある意味で出家僧侶から見るとかなり異質なものなんです。なので、仏教全体から見ると結婚式に関わっていくというのは、出家僧侶には難しいことなのかもしれません。ある意味日本は例外なんです。だから中国で仏式がないというのは、中国のお坊さんとはみんな出家僧侶ですから仏式の結婚式はありえないのです。日本の仏教では浄土真宗以外はちょっと例外かもしれませんが、僧侶たちも結婚し始めているからそれも可能となるけれど、ちょっと難しい：積極的ではないのかもしれない。」

仏前でウェディングドレスを着てもいいのか？

稻荷「中国でもウェディングドレスを着るようになったのは最近ということですが、日本ではどのようなのでしょうか？」

小野寺「私たちが今当たり前のように思っている結婚式は挙式と披露宴がひとつになったものをイメージされるかと思いますが、こういった形式になったのは六〇年前、遡ってもせいぜい一〇〇年くらいのは歴史がありません。宗教が結婚式に介入してきたのは明治時代になります。この時代にキリスト教の影響を受けて、宗教が結婚式の中へと浸透してくるようになりました。」

ケネス「六〇年以前といっても、神道的な式はありましたよね？」

小野寺「はい、それが主でやっていました。キリス

ト教的な儀式を行なうようになったのは戦後になります」

ケネス「今日の花嫁行列に対する、みんなの反応が予想以上でした。なかには拍手したりする人もいて、やはり目を引くのは新婦さんのドレスですよ。ね。あれはなにか、白いウェディングガウンというのは女性にとって魅力的なのでしょうか？」

久保川「そうですね、ウェディングドレス：やっぱり憧れますね。」

ケネス「では、日本の昔からある伝統的な衣裳、白無垢や角隠しはどうですか？」

久保川「最近では芸能人の方が神前式や仏前式で結婚式を挙げられて、きれいな和装の姿を見ると、素敵だと思いますね。ドレスも和装もどちらも魅力的だと思います。どちらか選ぶとしたら、それはお付き合いしている彼と二人で決めたいと思います。その選ぶ時に、その衣裳に託された意味であると

か、歴史を知った上で、自分にあったものを選びたいと思います。ウェディングドレスにはなにか意味があるのでしょうか？」

呉「ウェディングドレスのいわれですが、一九世紀から二〇世紀前半頃に婚約した男性から女性にオレンジの花を贈る習慣がありました。なぜ、オレンジの花かというと、オレンジはたくさん実がなることから、子どもに恵まれるようにとの願いが込められていたようです。その習慣が形を変え、結婚式の時、新郎から新婦へ白いドレス、白いオレンジの花、白いヴァージンロード、すべて白い色で花嫁を包むという習慣になりました。」

稲荷「ウェディングドレスにはこういったいわれがあるわけですが、そういういわれがあるながら、仏前でも着ることができるというのは、司婚者の立場からしてどう思われますか？」

石上「基本的には何でもいいと思います。仏教はそ

もそもインドで起こっておりますので、そう考えればインド式の結婚式であってもいいわけだし、中国から伝わってきたわけだから中国式の結婚式でもいいと思います。日本のものでないと仏前結婚式はいけないということは全然無いと思います。仏教は世界的な教えですので、その点に囚われることは無いと思います。うちの寺でもそうですがどこでも同じだと思います。そこには全然抵抗は感じません。」

ケネス「仏教はかなり寛容的な教えですから、その土地にあった法式でやればいいと思います。私のようにアメリカではもちろんドレスで仏前結婚式を挙げます。」

信じていない神に愛を誓う？

ケネス「ちょっと刺激的な質問をすると、日本人がハワイに行つて、ウェディングドレスを着て結婚式

を挙げる、それもキリスト教の教会で結婚するということとは、多くのアメリカ人にとって不可思議なんです。神に誓うということは、その神を信じていなければ、どうして誓うことができるのでしょうか、それが不思議でならないという人が結構、私の友人にいます。で、プロテスタントの牧師である友だちはハワイで日本人専門に式を挙げています。毎週、日本から来るカップルの司婚をしている訳ですが、その仕事をしていながら、実際私は不思議だということをおっしゃっていましたけど。そのへんはどうですかね？」

久保川「日本はいろんな宗教が交じっていて、初詣に行ったりお葬式は仏前でしたり…ホントにいろいろバラバラなんですけど…」

小野寺「私の友人なんかは新婚旅行もかねて海外で挙式するというのもありましたし、あとはよく海外で挙げたいというところが多いですね。」

ケネス「以前にハワイに行く途中の空港で、結婚式を挙げる親族の十五人ぐらいのグループがいたんですよ。そこで、ワザと同じ質問をしたんですね。そうしたらその辺はよく分からないけれど、実はこの方が安いですよ。安くつくと、経済的にも新婚旅行も一度にできる、親類縁者をすべて呼ばなくてもこじんまりできるというようなことをいっていました。まあ、宗教観の違いですからね。西洋的な宗教観と日本的な宗教観では違いがあるようです。ですから、この結婚式という形を通して、その違いが明らかになると思うんです。コレもひとつの勉強だと思っています。」

石上「教会式、チャペルで結婚式を挙げる人が多いということなんですけれども、ずっと神社の神前式が多かったのがちよつとした流れで教会式が圧倒的に多くなっちゃったって言うのは結構驚きなんですけど。最近あった結婚式のときに、結婚式のお手

伝いをされている会社の方と話したら、最近はどういうのが多いんですかと聞いたら、チャペルではやるけどキリスト教式ではない人前式というのがすごく増えていくんですというんですね。だから、ケネス先生のお話にもあったように、キリスト教式がいつて言うのも、チャペルや白いヴァージンロードでやりたいっていうのなんですね。だから、今お坊さんがいない葬式があるように、神父さんとか牧師さんがいないチャペルでの人前結婚式が増えているという話を伺って、そうなんだなあと。あまり、宗教観とかそういうところまで考えてはいないっていう人も多いんじゃないかなと思いました。」

ケネス「ひとつ笑い話があるんですけども、ハワイにいた牧師さんが実は偽物ということが発覚したんですね。でその偽物の牧師さんに司婚してもらった日本人のカップルがどう反応したかというのと、とても怒ったそうです。我々は偽の牧師さんの前で結

婚したと。だけど別の見方をすると、日本人のカップルは神を信じていないのだからどっちでもいいのではないかという、ちょっとおもしろい議論になったことがあります。」

稲荷「日本でのものの考え方、宗教観といったことが話題になってきましたが、中国ではどうでしょうか？」

呉「一応少数民族とはいっても、都会で生活している民族は今多いので、さきほど先生がおっしゃったとおり、牧師さんもないし、教会も日本みたいにきれいな教会とかはあまりないので、普通のホテルでヴァージンロードがあって花があって、それで普通にキリスト教式のような形で結婚式を挙げる形が多いです。それはやはり新郎新婦が満足する形であるようです。そこで、先生に聞きたかったのです。このままでもいいのかなと。」

石上「小野寺さんに歴史を調べてもらったように、

日本は明治になってから神道の形が全面的に出てきて、それでまた欧米列強の影響があつて神前式が増えてきたのでしょうか、それまでは、あまり知られてはいませんが、全国どここの家庭でも神棚というのがありました。アレは実は明治になってからなんです。ですからやはり、明治になった時に、国家神道ということであることがはじまつて、神棚とか神前の結婚式というのになつてきたようですよ。じゃあ、それ以前はどうしていたのかというと、

最初の頃の庶民は結婚式なんてしなかったかもしれないが、それなりのところは自宅のお座敷で、一番きちんとしたお部屋、仏間とかですね、そういうところで仲人さんが立ち会うというような、まさに人前式というか宗教がそこに入っていたわけではないですね。仏教にしても神道にしても。だから、日本の結婚式というのは歴史を辿れば無宗教的な結婚式のほうが伝統的だったのかと思えば、あまり気

にしくてもいいのではないかなと思います。歴史ということにこだわるならばそうだと思います。」
ケネス「結婚というのは、家族と家族の繋がりがなければですね、ですからそういう面では、やはり横の繋がりがつていう社会的なつながりのほうが重要視されていて、個人個人が結びつくというかそれを正当化するような重要性はとくに超越したものに正当化される必要はなかったかもしれませんね。」

武蔵野大学で結婚式が挙げられる？

稻荷「自分の気持ちと何かしつくり来るような結婚、結婚式の形というのは思い浮かびますか？」

久保川「難しいですけども、何か大きいものになつて自分の愛を誓い合うというのでもいいと思いますし、信じていないものに向かつて誓うというのはやはり違ふかなと思います。でも、どれもいいなと

思うところもあるので、いろんな迷いが出てきますね。やはり適齢期になっていい人を見つけて……さっきも言ったんで恥ずかしくなっちゃうんですけれども、彼と二人で、考えられればいいなと思います。やはり、自分が満足するのが一番なんじゃないかなというのがすごく思いますね。」

呉「私が今考えているのは、もし日本の男性と国際結婚をしたらどんな結婚式したほうがいいかなあって思うんですね。さっき生で仏前結婚式を見て一応私も仏教徒なので、仏前式にした方がいいかもしれないと思いました。とても懂れです。」

稲荷「このシンポジウムをやったかいたがったみたいですね。仏前式もいいなと言っていたけどところで、実は仏前式というのは仏壇があればできるというのを伺っていたので、あそこでもできるのではないかと……。雪頂講堂をご存知ですか？立派な仏間がある武蔵野大学の講堂なんですけれども、そこで

結婚式を挙げるのができないかと学生課に確認したら、できるそうなんです。今日のように学内をパレードして雪頂講堂で、先生に式を挙げていただくというのが可能みたいです。」

石上「IC」なんかは母校のチャペルで結婚式を挙げるなんて話も聞いたことがありますよね。ここでもうと雪頂講堂みたいなものですが、そこでパーティーもやったり、なかなか楽しいみたいです。今のアイディアいいんじゃないですか？」

ケネス「だからですね、来年の摩耶祭のときに、募集して結婚するような人がいたら実際にやってもいいかなと思いますよ。もしそういうカップルが出れば非常にうれしく思いますので、心を込めてやらせていただきたいと思います。摩耶祭の時じゃなくてもいいかもしれない。私も、学生には時々言ってるんですよ。でも、まだ誰も。」

稲荷「やはりまだ難しいようなイメージが強いので

しょうか？」

ケネス「仏教で、というのがやはり多くの人にとって、武蔵野大学の学生でありながらも、ちょっと抵抗があるんじゃないかと思うんですね。だから今日、これをきっかけとして仏前結婚式：仏教について知ってもらえればと思います。」

久保川「そうですね。私が言えたことか分かりませんが、やっぱり結婚は一生の思い出ですし、印象に残るものにしたいですし、仏前式でも神前式でも教会式でも、最後は悩んで悩んで、これだ！って自分が思うものにするのが一番なんじゃないかなと思うので、仏前結婚式やればよかったなとか後で思うことがないように、仏前式のことも含めいろんな選択肢について知っておいたほうがいいのではないかなと思います。」

呉「実は私の父は、中国の民族作家であり、仏教の研究者でもあります。ですので、私も仏教の大学に

入って仏前式の結婚式に抵抗感は全然ありません。もし、日本で結婚できたら仏前式やりたいという気持ちが強くなってきました。」

小野寺「やはり若い人は結婚式を目指して頑張ると思うんですが、私が考えるのはそこからが大変なので、そこが始まりであってですね、それでダウンされないようにすることが一番いいかと思うので、初心というのが私の中ですごく大切にっていて、初心というのは調べたら仏教用語なんです、初発心というのが語源だそうです。初心というのがとても重要なんだと、そこは忘れないで欲しいというところで、いろいろ悩んだりして決めていただけたらいいんじゃないかと思います。」

沼田奨学生主催シンポジウム

司婚者・講師

ケネス田中（本学政治経済学部政治経済学科教授、

仏教文化研究所所長）

石上 和敬（同 薬学部薬学科准教授、仏教文化研

究所研究員）

パネラー

久保川みのり（同 環境学部環境学科環境学専攻二

年、沼田奨学生）

呉 冰（同 文学部日本語・日本文学科四年、

沼田奨学生）

小野寺香織（同 人間関係学部社会福祉学科二年、

沼田奨学生）

司会者

稲荷 咲（同 人間関係学部人間関係学科四年、

沼田奨学生）